

## 全体と部分の相関

3.11の東日本大震災後、盛んにテレビなどで繰り返されたキャンペーンに「ひとつになろう、日本」がある。被害にあわれた人々、復旧・復興に向けて支援している人々を応援するために日本中が一つになって頑張ろうという趣旨である。

また、震災後の日本人の姿勢は世界が注目し、その礼儀正しさ、我慢強さ、静かな振る舞いは、世界の多くの人たちに驚嘆の感想をもたらしている。日本人にとってはなんら不思議ではない光景だが、日本人はどのようにしてこのような構えを身につけたのだろうか。

日本列島は、有史以来、多くの自然災害に見舞われてきた。火山列島であり、国土の70%近くが森林に覆われ、国土の東側には世界有数の海溝がある。当然のように、巨大地震や津波が頻繁に襲ってくる。毎年のように梅雨時には、台風が何度も日本列島を駆け上り、甚大な被害をもたらしている。人々は、協力し合い、常に自然災害の恐怖に立ち向かうなかで諦念の精神を身につけ、悲しい思いを持ち前の忍耐強さと負けん気で乗り切ってきた。

東日本大震災では、「全員野球」という言葉もこの困難を乗り越えるためのモットーとして頻繁に、そして当然のように語られた。「全員野球」は集団に大きな危機が迫ったときに、あるいは頼りになるメンバーが突然いなくなった時に残されたメンバーを鼓舞するときに、全員野球で頑張ろう、と持ちだすスローガンだったりもする。

全員野球は、高校野球には欠かせない。出番のないスタンドでゲームの行く末を見守っている野球部員もみんなが心を一つにして、野球をする。大きな声を出して、ひとつひとつのプレーに、わがことのように一喜一憂する。そこに、わたしたちは美しいものに触れた感覚をもち、感動すら覚える。

全員野球の反対は、個人プレーである。個人プレーという言葉は、あまりいい意味で語られることは少ない。むしろ、わがまま、自己中心、人に迷惑をかけている、といった意味合いが強く、ネガティブな印象すらある。なぜならば、日本人のこれまでの生き方、考え方に反するからであろう。

しかしながら、全員野球には批判と向きあい、前例を否定しての新しい考えかたや行動を生み出すといったことは少ないかもしれない。

アーサー・ケストラー(1905-1983)は著書の「ホロン革命」で全体と部分の関係をつぎのように述べて

いる。「全体は部分であり、全体である。社会組織がそうであるように、動物、植物の世界でもそれぞれの部分はその個性体を主張する」という。ホロンは、大きな全体の一部として機能する「統合傾向」があり、一方では独自の自立性を維持しようとする「自己主張傾向」という反対の傾向をもっている。ホロンは、この両方のバランスのとれた動的平衡状態のなかで存在するという。

「だが、有機体の(社会の)ある部分がストレスにさらされると、その部分の自己主張傾向は抑制がきかなくなり、部分は全体のコントロールから逃れようとする。こうして病理学的な変化が生まれる」ともいう。

半面、ケストラーは、「人類が苦境に陥った原因の大半は、途方もない統合傾向にある」と述べている。

日本人が困難な状態に陥った時、口にする「全員野球」は、ある一定の時間軸であれば効果的であるが、常態化すると個人の輝きを鈍いものにし、目上のものに対する従属となり、企業や国家に対する盲目的な服従になりかねない。

チームワークは、ある目的を達成するために2人以上の集団で仕事をする事だと思いが、決して仲の良い集団である必要はない。もちろん、集団内のメンバーが仲のよいのにこしたことはないが、チームワークを発揮するには、集団内の一人ひとりが目的を理解すると同時に、切迫感をもって危機を共有できるかどうかがかかわってくる。その状態では、「自己主張傾向」は抑制気味になり、「統合傾向」を重視することになるだろう。

だが、その目的がある程度達成されるにつれて、「統合傾向」は重苦しく窮屈さをもたらし、強制力を帯びてくる。集団にとって非常事態の場面では、我慢や忍耐が求められるが、それが次第に目的化して思考停止に陥ってしまうことは集団にはよくあることだ。

このような時には、集団を出来るだけ明るい方向に向けさせることだと思いが、なによりも全員野球に代表されるチームワークのよさと、異端ともいべき卓越した個人プレーのほどよい動的バランスが欠かせない。

最近では、なでしこジャパンの佐々木監督が自分たちのサッカーを「全員サッカー」と表現しているが、「個の質が伴わないと、このサッカーはできない」とも述べている。

連合総研主任研究員 矢鳴浩一